

関係各位

京都府病虫害防除所長
(公 印 省 略)

病虫害発生予察情報について

下記のとおり発表しましたので送付します。

病虫害発生予報第 9 号 (1 1 月)

予報の概要

作物名	病虫害名	予想発生量 〈平年比(前年比)〉
チャ	カンザワハダニ	山城 <u>やや多</u> 丹波 並 丹後 並
	チャノホソガ	山城 やや少ない 丹波 やや少ない 丹後 やや少ない
野菜	アブラナ科野菜 ベと病 アブラナ科野菜 白さび病 アブラナ科野菜 白斑病 キャベツ 菌核病 キャベツ 黒腐病 アブラナ科野菜 コナガ ネギ ネギアザミウマ ネギ ネギハモグリバエ 野菜類 シロイチモジヨトウ	やや少 (並) 並 (並) やや少 (やや多) 並 (並) 並 (並) <u>やや多</u> (多) <u>やや多</u> (やや多) 並 (やや多) <u>やや多</u> (やや多)

※平年とは過去 10 年の平均である。

目 次

予報の概要	1
予報本文	2
今後注意すべきその他の病虫害等	7
参考	
I 近畿地方の気象の 1 か月予報	9
II 用語の定義	9
III 予報本文の見方	10

農作物病虫害情報サービス

ホームページ

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/>



QRコード

※QRコードは株式会社

デンソーウェブの登録商標です

予報本文

チャ

1 カンザワハダニ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い
丹波 平年並
丹後 平年並

予報の根拠

(1) 10月中旬現在、発生量は山城で平年並、丹波で発生を認めず（平年比やや少ない（-））、丹後で発生を認めていない（平年並）。

地域	項目	本年	平年値
山城	寄生葉率(%)	0.2	1.0
	寄生虫数(頭/100葉)	0.2	2.8
	発生ほ場率(%)	9.1	16.8
丹波	寄生葉率(%)	0.0	0.5
	寄生虫数(頭/100葉)	0.0	1.6
	発生ほ場率(%)	0.0	20.0
丹後	寄生葉率(%)	0.0	0.9
	寄生虫数(頭/100葉)	0.0	2.8
	発生ほ場率(%)	0.0	25.0

(2) 向こう1か月の気温は高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 気温が低下するとすそ葉に移動して越冬し、翌春の発生源となる。
- (2) 翌春の一番茶期の発生を抑えるには、越冬前の防除が有効である。越冬前の防除が十分でないと、翌春の一番茶期間近に発生が多くなるので、越冬前防除の徹底を心掛け、遅くとも11月末までに終えるようにする。

2 チャノホソガ

予報内容 発生量：山城 平年比やや少ない
丹波 平年比やや少ない
丹後 例年比やや少ない

予報の根拠

(1) 10月中旬現在、発生量は山城で平年比やや少なく（-）、丹波で平年比少なく（-）、丹後で例年比やや少ない（-）。

地域	項目	本年	平年値(例年値)
山城	寄生芽率(%)	3.9	5.3
	巻葉数(枚/m ²)	0.1	4.0
	発生ほ場率(%)	10.0	40.6
丹波	寄生芽率(%)	0.8	11.4
	巻葉数(枚/m ²)	0.4	1.9
	発生ほ場率(%)	40.0	71.7
丹後	寄生芽率(%)	0.0	(6.4)
	巻葉数(枚/m ²)	0.0	2.3
	発生ほ場率(%)	25.0	53.3

(2) フェロモントラップへの誘殺数は宇治市で平年比やや少なく（-）、綾部市で平年比少なく（-）、京丹後市で例年比少ない（-）。

場所	項目	本年	平年(例年)値
宇治市	誘殺数(頭)	174.3	563.5
綾部市	誘殺数(頭)	62.0	587.3
京丹後市	誘殺数(頭)	44.7	(373.1)

※誘殺数(頭)：9月第3半旬～10月第2半旬計

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 通常、年5回世代を繰り返し、蛹で越冬する。
- (2) 特に自然仕立て園では園をよく見回り、発生を認めたら直ちに防除し越冬密度を下げるようにする。

※今後注意すべきその他の病害虫等は p. 7 を参照

野菜

1 アブラナ科野菜 ベと病

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年並)

予報の根拠

- (1) 10月中旬現在、キャベツで発生を認めず(平年並)、カブで発生を認めていない(平年比やや少ない)(-)。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	発病株率(%)	0.0	0.0
カブ	発病株率(%)	0.0	23.8

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) キャベツをはじめ、ハクサイ、ダイコンなどの各種アブラナ科野菜で発生し、アブラナ科野菜を連作した場合に発生が多くなる。
- (2) 気温が低く降雨が続く秋から初冬及び春先に発生が多い。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。

2 アブラナ科野菜 白さび病

予報内容 発生量：平年並(前年並)

予報の根拠

- (1) 10月中旬現在、ダイコン及びカブで発生を認めていない(平年並)。

作物	項目	本年	平年値
ダイコン	発病株率(%)	0.0	0.2
カブ	発病株率(%)	0.0	5.1

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている(-)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 10月～11月の降雨が連続する時期に発生が多い。
- (2) 窒素肥料の過多を避け、水はけを良くする。
- (3) 過繁茂にならないよう適切な播種量を心掛け、間引きを徹底する。

3 アブラナ科野菜 白斑病

予報内容 発生量：平年比やや少ない(前年比やや多い)

予報の根拠

- (1) 10月中旬現在、カブで発生を認めていない(平年並)。

作物	項目	本年	平年値
カブ	発病株率(%)	0.0	4.4
	発生ほ場率(%)	0.0	7.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている(－)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 雨の多い年は、初秋から晩秋にかけて発生が多い。
- (2) 強風雨や泥のはね上げは、本病の伝染、まん延を助長する。
- (3) 肥切れすると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
- (4) 多湿条件で発生しやすいので、ほ場の排水を良好にする。

4 キャベツ 菌核病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 本年4月に発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	0.1
発生ほ場率(%)	0.0	3.7

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている(－)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 発病適温は20℃前後で、曇雨天が続いた時に発生しやすくなる。
- (2) 発生終期に菌核が形成され土中に落ち、次の伝染源となる。菌核は土壌中で2～3年間生存する。
- (3) 発病株は菌核を形成するまでに抜き取り、適正に処分する。

5 キャベツ 黒腐病

予報内容 発生量：平年並（前年並）

予報の根拠

(1) 10月中旬現在、発生を認めていない（平年並）。

項目	本年	平年値
発病株率(%)	0.0	4.5
発生ほ場率(%)	0.0	21.2

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている(－)。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 害虫の食痕や風雨による傷口等は細菌の侵入を容易にし、本病の発生を助長するので、早期防除に努める。
- (2) 降雨日数と発生量との相関が高い。

6 アブラナ科野菜 コナガ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比多い）

予報の根拠

(1) 10月中旬現在、キャベツ及びカブで発生を認めず（平年並）、ダイコンで平年比多い(+)。

作物	項目	本年	平年値
キャベツ	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.0	0.1
	寄生株率(%)	0.0	1.1
ダイコン	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.7	0.2
	寄生株率(%)	6.0	1.3
カブ	幼虫・蛹数(頭/10株)	0.0	0.1
	寄生株率(%)	0.0	1.0

(2) 10月第2半旬現在の予察灯(60W)への誘殺数は、京田辺市、亀岡市、京丹後市いずれも平年並。

場所	項目	本年	平年値
京田辺市	誘殺数(頭)	0	0.1
亀岡市	誘殺数(頭)	1	1.5
京丹後市	誘殺数(頭)	1	4.0

※ 誘殺数(頭)は9月第3半旬～10月第2半旬の合計値

(3) 10月第2半旬現在のフェロモントラップへの誘殺数は、京田辺市で例年比やや多く(+)、亀岡市で平年並、京丹後市で例年並。

場所	項目	本年	平年値(例年値)
京田辺市	誘殺数(頭)	0.9	(0.3)
亀岡市	誘殺数(頭)	1.0	5.8
京丹後市	誘殺数(頭)	4.3	(8.6)

※ 誘殺数(頭)は9月第3半旬～10月第2半旬の合計値

(4) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間の発生回数が多く、各発育段階(卵、幼虫、蛹、成虫)が混在する。
- (2) 雨が多いと発生が抑制される傾向がある。
- (3) 雨よけ栽培の場合、降雨に関係なく急速に増殖することがある。
- (4) 被覆資材などを利用し、物理的防除に努める。

7 ネギ ネギアザミウマ

予報内容 発生量：平年比やや多い(前年比やや多い)

予報の根拠

(1) 10月中旬現在の発生量は、小株で平年並、大株で例年比やや多い(+)

株の種類	項目	本年	平年値(例年値)
小株	被害株率(%)	29.7	39.4
	被害度	13.1	10.1
大株	被害株率(%)	62.9	(43.3)
	被害度	15.7	(18.9)

※小株:葉長40cm未満、大株:葉長40cm以上

(2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 年間、10世代以上くり返し、葉の表層を食害し、かすり状の食害痕を残す。ネギでは葉鞘分岐部や葉折れの内側に多く寄生する。
- (2) 本種はアイリス黄斑ウイルス(Iris yellow spot virus: IYSV)による病害でネギえそ条斑病を媒介する。
- (3) 薬剤散布の他、赤色系防虫ネットやUVカットフィルムによる物理的防除が効果的である。

- (4) 被害葉及び収穫残さが本虫の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (5) 本種は、殺虫剤感受性低下が懸念されている。殺虫剤散布後は効果を十分に確認し、感受性の低下が疑われる場合は系統の異なる薬剤を散布する。また、感受性の低下を避けるため、系統の異なる殺虫剤をローテーション散布する。

詳細は下記の資料を参照。

技術資料「ネギアザミウマに対する薬剤殺虫効果（2021年）」

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negiazamiukanjyusei2021.pdf>

技術資料「ネギえそ条斑病防除マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_iysv-manual_20200124-forhp.pdf

技術資料「ネギ栽培における赤色系防虫ネット技術マニュアル」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/negi_redcolor-net_manual.pdf

8 ネギ ネギハモグリバエ

予報内容 発生量：平年並（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 10月中旬現在の発生量は、小株で平年比やや少なく、大株で例年比やや少ない（-）。

株の種類	項目	本年	平年値(例年値)
小株	被害株率(%)	9.1	34.4
	被害度	4.4	9.1
大株	被害株率(%)	10.3	(34.7)
	被害度	2.6	(9.7)

※小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上

- (2) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている（+）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 幼虫が葉肉部分を加害し、白い筋状の食害痕を残す。
- (2) 産卵から羽化までの発育所要日数は20℃で約36日、25℃で約23日程度である。
- (3) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にまとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (4) 1葉あたり1～数匹の幼虫が加害するバイオタイプA（従来系統）とは異なり、10匹以上の幼虫で集中的に加害し、葉を白化させるバイオタイプB（別系統）の発生を確認しているので注意する。

詳細は平成31年3月13日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/tokusyu201803_1.pdf

9 野菜類全般 シロイチモジヨトウ

予報内容 発生量：平年比やや多い（前年比やや多い）

予報の根拠

- (1) 10月中旬現在の発生量は、ネギの小株で発生を認めず（平年並）、大株で例年比少ない（-）。

株の種類	項目	本年	平年値(例年値)
小株	幼虫数(頭/株)	0.00	0.03
	寄生株率(%)	0.0	2.1
	発生ほ場率(%)	0.0	9.9
大株	幼虫数(頭/株)	0.00	(0.04)
	寄生株率(%)	0.0	(2.6)
	発生ほ場率(%)	0.0	(36.9)
	被害発生ほ場率(%)	14.3	(57.2)

※小株：葉長40cm未満、大株：葉長40cm以上。

(2) 10月第2半旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は京田辺市、亀岡市及び京丹後市で例年比多い(+)。

場所	項目	本年	例年値
京田辺市	誘殺数(頭)	151.0	66.4
亀岡市	誘殺数(頭)	287.6	91.4
京丹後市	誘殺数(頭)	550.4	246.0

※ 誘殺数(頭)は9月第3半旬～10月第2半旬の合計値

例年値 京田辺市:平成29～令和4年の平均値

亀岡市及び京丹後市:平成30～令和4年の平均値

(3) 向こう1か月の気温は平年比高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている(+)

発生生態及び防除上注意すべき事項

- (1) 本種は齢が進むと、薬剤の効力が低下するので、ほ場をこまめに観察して早期発見に努め、若齢期の防除を徹底する。
- (2) 被害葉及び収穫残さが本種の発生源となるので、残さは一箇所にとめて積み上げ、表面をビニルで被覆する等適切に処分する。
- (3) 本種は寄主範囲が広く、ネギ以外に豆類、野菜類、花き類を加害するので注意する。

詳細は下記の資料を参照。

令和5年9月29日付け「防除所ニュース第7号(野菜、豆類及び花き類等シロイチモジヨトウ)」

https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news2023_07.pdf

技術資料「シロイチモジヨトウに対する薬剤殺虫効果(2022年)」

<https://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/shiroichimojiyotou2022.pdf>

※今後注意すべきその他の病虫害等はp. 7を参照

今後注意すべきその他の病虫害等

チャ

1 チャトゲコナジラミ

10月中旬現在、京都府全域で発生を認めている。

本種の農薬による防除は、冬期(1～2月)のマシン油乳剤の2回散布が有効である。ただし、赤焼病の発病を助長する。そのため、マシン油乳剤を散布する3日から7日前に銅水和剤を事前に散布すると、これを予防できる。

野菜

1 トマト黄化葉巻病及びトマト黄化病

トマト黄化葉巻病は、黄化葉巻ウイルス(TYLCV: Tomato Yellow Leaf Curl Virus)の感染により引き起こされる病気で、症状は、先端部の葉が内側に巻く、葉縁が黄化、株の萎縮等で、タバココナジラミによって媒介される。

トマト黄化病はトマト退緑ウイルス(ToCV: Tomato chlorosis virus)の感染により引き起こされる病気で、症状は葉の一部の葉脈間が退緑及び黄化し、生理障害の苦土(マグネシウム)欠乏の症状に類似し、タバココナジラミ及びオンシツコナジラミによって媒介される。

詳細は令和3年8月6日付け「発生予察特殊報第1号」を参照。

2 タバココナジラミ

10月中旬現在の発生量は施設キュウリで平年比やや多く、露地ナスで平年比多い。

タバココナジラミは世界中に分布し、多くのバイオタイプ（形態的な区別が難しく、遺伝的、生物学的に異なる系統）が存在する。本州では在来系統（バイオタイプJ p L等）、バイオタイプB、バイオタイプQが確認されている。

バイオタイプQは薬剤感受性が低く難防除害虫であるので、以下の3点を防除対策の基本事項として、防虫ネットや黄色粘着ロール及び農薬等を組み合わせた「総合的害虫管理」が有効となる。

◎施設内にコナジラミを「入れない」。

- (1) 開口部の防虫ネット被覆。
- (2) 黄色粘着ロールの展張。
- (3) 近紫外線カットフィルムの使用。

◎施設内・施設周辺のコナジラミを「増やさない」。

- (1) 発生初期の防除の徹底。
- (2) 薬剤のローテーション防除の実施。
- (3) 天敵や微生物農薬の有効利用。

◎施設内からコナジラミを施設外に「出さない」。

- (1) 開口部の防虫ネット被覆。

3 ネギべと病

平均気温が15～20℃で降雨が多くなると、ほ場にすき込まれた罹病残さ等に潜伏している病原菌の活動が再び活発となるので、本病の発生には十分注意する。

参 考

I 近畿地方の気象の1か月予報

(10月14日から11月13日までの天候見通し)

令和5年10月12日
大阪管区气象台発表

<予想される向こう1か月の天候>

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下の通りです。

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。

週別の気温は、1週目は、平年並または高い確率ともに40%です。2週目は、平年並の確率50%です。3～4週目は、高い確率50%です。

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いですが、寒気の影響を受ける時期もあるでしょう。

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
気 温	20	30	50
降 水 量	50	30	20
日 照 時 間	20	30	50

病虫害防除所では上記の天候の1か月予報の表現を「向こう1か月の気温は高く、降水量は少なく、日照時間は多いと予想されている。」としました。

II 用語の定義

1 半旬のとり方

第1半旬 第2半旬 第3半旬 第4半旬 第5半旬 第6半旬
各月の 1～5日 6～10日 11～15日 16～20日 21～25日 26～最終日

2 発生量――病虫害の発生程度と広がり両面を加味したものをいう。

3 平年値――原則として過去10か年の平均とする。
データが10年に満たない場合は例年値とする。

4 平年値との比較

1) 時期

平年並	平年値を中心として前後2日以内
やや早い	平年値より3～5日早い
やや遅い	平年値より3～5日遅い
早い	平年値より6日以上早い
遅い	平年値より6日以上遅い

2) 量(発生量、発生面積等)

平年並	平年値並の発生で10年間に4回は発生する程度の普通の量
やや多い	「平年並」より発生が多く、10年間に2回程度の頻度で発生する量
やや少ない	「平年並」より発生が少なく、10年間に2回程度の頻度で発生する量
多い	「やや多い」より多く、10年間に1回程度しか発生しない量
少ない	「やや少ない」より少なく、10年間に1回程度しか発生しない量

Ⅲ 予報本文の見方

1 チャノコカクモンハマキ

予報内容 発生量：山城 平年比やや多い（前年比やや多い）
 丹波 平年並（前年並）
 丹後 例年並（前年並）

- ・「予報内容」は、今後の病害虫発生状況や発生時期の予測を平年比で示しています。
- ・平年比の見方は、「Ⅱ 用語の定義、4 平年値との比較」を参照してください。
- ・（ ）内の前年比は予想月の前年の発生量（時期）との比較です。
- ・必要に応じて地域別に示します。

予報の根拠

- （1）前年10月の発生量は、山城、丹波、丹後で平年並の発生。
- （2）4月中旬現在、山城で平年比多く（+）、丹波、丹後で発生を認めていない（平年（例年）並）。

地域	項目	4月の調査結果	4月 平年値
山城	綴葉数(/㎡)	3.0	0.1
	幼虫数(/㎡)	0.5	0.0
	発生ほ場率(%)	22.7	3.7
丹波	綴葉数(/㎡)	0.0	0.5
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	11.7
丹後	綴葉数(/㎡)	0.0	0.0
	幼虫数(/㎡)	0.0	0.0
	発生ほ場率(%)	0.0	0.0

- ・「予報の根拠」として直近の巡回調査のデータの中で主だったものを示しています。平年値も記載しているので、防除等の目安としてください。

- （3）4月中旬現在、フェロモントラップへの誘殺数は、宇治で平年比少ない（-）。

発生生態及び防除上注意すべき事項

- （1）幼虫で越冬し、春に羽化した成虫が発生源となるので、前年秋に多発した園では注意する。
- （2）通常、第1回目のふ化期は5月末～6月始めで、4回世代を繰り返す。
- （3）ふ化した幼虫は成長すると、葉を綴って食害するようになり、薬剤がかかりにくくなるので、ふ化直後の若齢幼虫期の防除が効果的である。

- ・「予報の根拠」は、巡回調査の結果、天候、フェロモントラップや予察灯への誘殺状況、指導機関からの情報等、「予報内容」で示した発生量や発生時期の予測の根拠となった事項を記載しています。
- ・文中の（-）、（+）は、予測される発生量に影響を及ぼすと考えられるもので、（-）の場合発生が少なくなると考えられる要因、（+）は発生量が多くなると考えられる要因を示しています。

- ・「発生生態及び防除上注意すべき事項」は、当該病害虫の生態、薬剤防除や耕種的防除方法の留意事項、要防除水準等を示しています。

※病虫害防除については、病虫害防除所・最寄りの農業改良普及センター又は農協にご相談ください。

詳しい農薬情報は、農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」をご覧ください。

ホームページアドレス http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/index.html

農業改良普及センター 電話番号一覧		
・ 京 都 乙 訓	農業改良普及センター	0 7 5 - 3 1 5 - 2 9 0 6
・ 山 城 北	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 6 2 - 8 6 8 6
・ 山 城 南	農業改良普及センター	0 7 7 4 - 7 2 - 0 2 3 7
・ 南 丹	農業改良普及センター	0 7 7 1 - 6 2 - 0 6 6 5
・ 中 丹 東	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 4 2 - 2 2 5 5
・ 中 丹 西	農業改良普及センター	0 7 7 3 - 2 2 - 4 9 0 1
・ 丹 後	農業改良普及センター	0 7 7 2 - 6 2 - 4 3 0 8

京都府病虫害防除所

〒621-0806 京都府亀岡市余部町和久成9

TEL 0771-23-9512

FAX 0771-23-6539

－農薬の使用にあたっては使用基準を遵守すること－